

神戸女学院第十一代院長就任式

一九九〇年十月二十三日

一九八八年十二月三十一日を以て、三期一二年間に亘って第十代院長の重責を負われた岡本道雄教授が退任なさった後、山口光朔教授が院長代行を務めていらしたが、今般一九九〇年十月一日附で、城崎進先生を第十一代院長としてお迎えすることとなった。新院長就任式は、穏やかな好天に恵まれた標記の日、午後二時三〇分より講堂において執り行なわれた。

講堂の壇上には、向かって右側から高倍幸子同窓会長、小玉佐智子学長、宮田満雄関西学院院長、松山義則同志社総長、今田稔理事長代理、城崎院長、ピーター・パウアー コーベ・カレッジ・コーポレーション(KCC)会長、原田恵子中高部長、茂洋学院チャブレンの順に着席。下手に司会の今村一之総務部長の席、上手奥には金屏風を背に花木と竹を用いた生花がしつらえられた。座席の方は、KCCより来日の方々を含む来賓、現旧教職員、父兄、同窓生、学生・生徒など約四〇〇名で埋まった。

前奏に引き続き一同で讃美歌二八四番を唱和。原田中高部長が学院のモットーであるマタイ伝二二章の一節を朗読。高倍同窓会長が、学院に時に叶った院長が与えられたことを感謝し、一同が愛神愛隣の精神を受け継ぎつつ新院長と共に歩むことができるように、また新院長に健康と上よりの祝福が与えられるようにとの祈りを捧げられた。

一同で讃美歌三三九番を歌ったあと、十月十八日に急逝された原清理事長に代わり、今田理事長代理より挨拶と新院長就任経過についての報告があった。院長選任については、理事会の内に設置された院長選考委員会において学内の意見も聴取しつつ検討を重ね、一九九〇年六月の理事会で、当時関西学院大学神学部教授でいらした城崎先生の選任が決まったとのことであった。

次いで城崎院長の就任の辞。初めにKCC代表の方々へ英語での謝辞があり、院長は三つの所信を表明された。第一に、「神戸女

学院寄附行為」の前置きによって立つこと、第二に student first の姿勢を忘れないこと、そして第三に建学の精神を生きるということである。即ち、キリスト教と国際理解の精神に基づいて教育を行ない、愛神愛隣の教えに共鳴する卒業生を世に送りだすべく、教職員が一つになって務める、ということであり、院長は、この三つを皆が心に刻んで共に励んでゆきたいとおっしゃった。

このあと院歌を斉唱、続いて四人の方々より祝辞を戴いた。まず同志社の松山総長は、本学院と趣旨を同じくするキリスト教学校教育同盟及び同志社を代表してのご挨拶。先生は、百年余り前に同志社に播かれて関西に広まったクロイバーが、今の同志社ではほんの少しの場所にしか残っていない、とお話になり、クロイバーを校章とした神戸女学院が、その表わすところ―身体、精神、靈魂の一致調和―と建学の精神を、経験豊かな城崎新院長の下で実現されますようにと期待して下さった。次に近隣諸学校の代表として、関西学院の宮田院長。城崎院長が長く勤められた関西学院では転任を惜しむ声が大きいかれども、様々な意味で縁の深い神戸女学院でのご活躍は関西学院の人々にとっても励みになるだろう、とおっしゃったあと、同じキリスト教学校として神の御旨にかなった働きができるようにと結ばれた。そして、KCC会長バウアー氏の日本語での挨拶が続く。氏は、城崎院長の選任が神の意志によるものであり、それは即ち神と人とに仕えるという学院創立の本来の目的の再確認でもあると述べ、KCCのメンバー一同、新院長の就任を祝し、学院の教育内容の充実と国際的人間の育成などの点で協力を惜しまないと約束、バウアー夫人のお祖母様の詩を朗読して下さった。最後に、小玉学長が教職員を代表して新院長就任に感謝する。学院関係者の誇りとするところであったキリスト教主義教育の伝統とその成果にのみより頼むことが難しくなり、様々な改善の求められている今日、一同の新院長への期待は余りにも大きい。私たち教職員もまた、協力して学院の充実発展に努めようと呼びかけられた。

その後、奥村智美教授によるシューマン―リスト曲「献呈」のピアノ演奏があり、司会者により、各方面から頂戴した百余通の祝電のうちの一部が披露された。そして讃詠五四六番に続き、茂チャプレンの祝禱を以て一時間余に亘る式典はよろこびのうちに終了した。なお、当日の演奏は音楽学部一〇六回卒の高梨 京さんのご奉仕によった。

式のあと大学中庭において立食形式のティーパーティーが催され、参列者の歓談の場となった。

(石村 真紀)